

# 2018年度 防災教育 チャレンジプラン 活動報告会

Disaster Management Education Challenge Plan Competition

2018年度  
防災教育  
チャレンジプラン  
成果発表

2019年度  
防災教育  
チャレンジプラン  
決定・発表

日時: 2019年2月23日(土) 10:00 ~ 17:00  
会場: 東京大学 地震研究所1号館(東京都文京区)



[www.bosai-study.net](http://www.bosai-study.net)

主催: 防災教育チャレンジプラン実行委員会、内閣府(防災担当)、国立研究開発法人防災科学技術研究所

共催: 東京大学地震研究所

後援: 消防庁、文部科学省、国土交通省、全国知事会、全国市長会、全国町村会、日本赤十字社、全国都道府県教育委員会連合会、日本PTA全国協議会

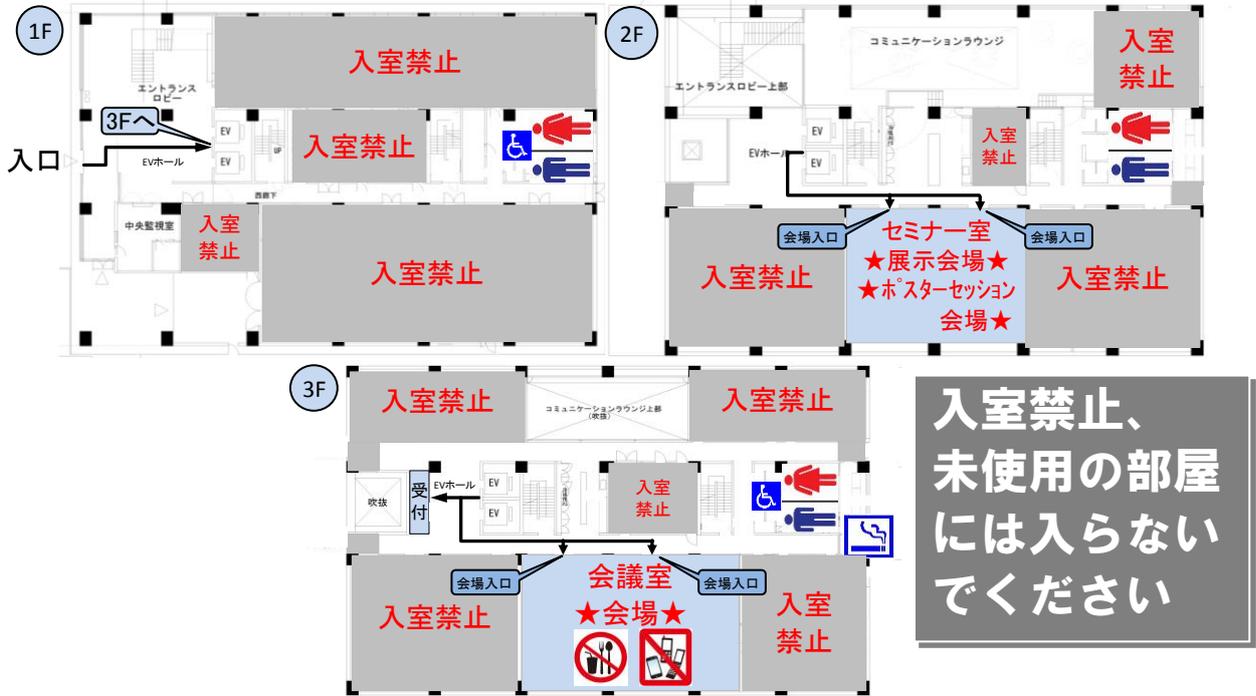


河川  
基金

公益財団法人河川財団による  
河川基金の助成を受けています。

# 会場図

## 館内図



- ※ 喫煙所は、3階喫煙室のみになります。それ以外は屋外も含めて禁煙です。
- ※ 施設常設の機器等には、お手を触れないでください。
- ※ 入室禁止箇所、未使用の部屋には立ち入らないでください。
- ※ 報告会会場内での、飲食及び携帯電話の通話はご遠慮ください。  
(2階コミュニケーションラウンジ・給湯スペースでお願いします)。

## 会場図





## 会場利用案内

### ■ 会場座席

- ・「会場図」に従い、所定のエリアにご着席ください。

### ■ 施設利用にあたっての注意

- ・喫煙は、指定の場所以外は《禁煙》です。
- ・施設常設の機器等には、お手を触れないでください。
- ・入室禁止箇所、未使用の部屋には立ち入らないでください。
- ・昼食は2階コミュニケーションラウンジ・給湯スペース、もしくは近隣の店舗等をご利用ください。
- ・ゴミは、各自の責任ですべてお持ち帰りください。
- ・携帯電話は、電源をお切りになるかマナーモードに設定し、会場内での通話をご遠慮ください。
- ・大学内では、他にも講演・試験等が実施されていますので、教室周辺ではお静かにお願いいたします。

### ■ 発表・講演等の記録について

- ・活動報告会の記録のため、事務局側にて、音声の録音、ビデオ撮影、写真撮影を行います。また、これら資料をデータベース化し、防災教育チャレンジプランが関係する媒体（ホームページ、パンフレット、報告書等）へ掲載または関係者に提供しますので、ご了承ください。

### ■ ネームプレートについて

- ・受付でお受け取りになったネームプレートは、首からお提げください。
- ・昼食時等で外出される場合、入館時には必ずネームプレートをご提示ください。
- ・お帰りの際は、受付常設のネームプレート回収ボックスに、ご返却をお願いします。

《発表団体対象》

### ■ 展示物について

- ・展示物掲示～配置～撤去及び回収は、出演団体各位の責任で行ってください。
- ・施設の床、壁面、備品等を汚したり、傷をつけたりしないよう、ご注意ください。

### ■ 発表方法について

- ・事前にご提出のスライドデータに基づき、説明を行っていただきます。
- ・発表時間は事前にお知らせしたとおりです。時間の経過は、ベルでお知らせしますので、**時間厳守**をお願いします。
- ・各部の発表順が2番目以降の発表者は、ひとつ前の団体の説明が始まるのと同時に、各自で待機席まで移動していただき、ご着席ください。

# 防災教育チャレンジプランとは？

## ■ 防災教育チャレンジプランの目的

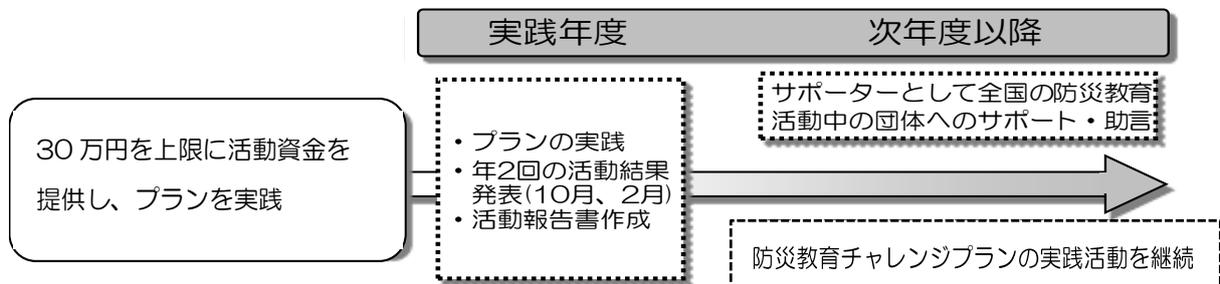
国内外で大規模な災害が起きている昨今、またいつ災害がやってくるかわかりません。いつやってくるかわからない災害に備え大切な命を守り、できるだけ被害を減らし、万が一被害があった時すぐに立ち直る力を一人一人が身につけるため、全国の地域や学校で防災教育を推進するためのプランです。

全国各地の防災教育への意欲をもつ団体・学校・個人等に対し、より充実した防災教育のプランを募集し、「防災教育チャレンジプラン」として選出した上で、その実践への支援を行います。

1年間の実践の後、その実践例や支援した取り組みの内容を活動報告会を通じて広く公開・共有するとともに優れた実践の表彰を行うことで、全国の防災教育に取り組む団体・学校・個人やそのプランに光をあて、各地域で自律的に防災教育に取り組むことのできる環境づくりを目指します。



## ■ 防災教育チャレンジプラン実践団体の構成と実践スケジュール





## 2018年度 実行委員の紹介

### (委員長)

林 春男	国立研究開発法人防災科学技術研究所 理事長
市川 啓一	株式会社レスキューナウ危機管理研究所 代表取締役
井上 浩一	防災ネットワークプラン 代表
鍵屋 一	跡見学園女子大学観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科 教授
金田 義行	香川大学四国危機管理教育・研究・地域連携推進機構 副機構長・地域強靱化研究センター長・学長特別補佐・特任教授
木村 玲欧	兵庫県立大学環境人間学部 准教授
国崎 信江	株式会社危機管理教育研究所 代表
栗田 暢之	認定特定非営利活動法人レスキューストックヤード 代表理事
齊藤 清一	特定非営利活動法人日本ジオパークネットワーク 事務局長
酒井 慎一	東京大学地震研究所観測開発基盤センター 准教授
佐藤 公治	南三陸町立歌津中学校 主幹教諭
佐藤 健	東北大学災害科学国際研究所情報管理・社会連携部門災害復興実践学分野 教授
澤野 次郎	災害救援ボランティア推進委員会 委員長
篠田 貴司	足立区立第九中学校 主任教諭
諏訪 清二	防災学習アドバイザー・コラボレーター
瀧川 猛	千葉県立長生特別支援学校 教頭
中川 和之	株式会社時事通信社 解説委員
中村 一樹	国立研究開発法人防災科学技術研究所気象災害軽減イノベーションセンターセンター長補佐・研究推進室長
平田 直	東京大学地震研究所地震予知研究センター センター長・教授
福和 伸夫	名古屋大学減災連携研究センター センター長・教授
船木 伸江	神戸学院大学現代社会学部社会防災学科 准教授
舟生 岳夫	セコム株式会社 IS 研究所リスクマネジメント G 主務研究員
松尾 知純	防災ゲート・パートナーズ 代表
三浦 伸也	国立研究開発法人防災科学技術研究所社会防災システム研究部門 主幹研究員
南島 正重	東京都立両国高等学校附属中学校 主幹教諭
安彦 広齊	文部科学省総合教育政策局男女共同参画共生社会学習・安全課 安全教育推進室長
五島 政一	国立教育政策研究所教育課程研究センター基礎研究部 総括研究官
佐谷 説子	内閣府政策統括官(防災担当)付 参事官(普及啓発・連携担当)
田中 昇治	総務省消防庁国民保護・防災部防災課 地域防災室長
林 正道	内閣府政策統括官(防災担当)付 参事官(調査・企画担当)
松浦 直	国土交通省水管理・国土保全局防災課 緊急災害対策企画調整官
村山 綾介	文部科学省研究開発局地震・防災研究課 防災科学技術推進室長

(平成 31 年 1 月 8 日現在、所属役職別 50 音順、敬称略)

# プログラム

9:00～	受付(3階エレベーター前)
10:00	開会
10:00	開会挨拶 防災教育チャレンジプラン実行委員長 林 春男 内閣府政策統括官(防災担当)付 企画官(普及啓発・連携担当) 石垣 和子
10:10	2018年度 実践団体発表① 司会：防災教育チャレンジプラン実行委員 佐藤 公治
10:10～	① 川口市立鳩ヶ谷中学校 ※発表1団体 10分
10:20～	② ESDまちプロジェクト防災応援隊 ～ 学校防災活動拠点事業(大田区立南六郷中学校)～
10:30～	③ ライフデザインイノベーション研究会
10:40～	④ 金沢大学人間社会学域学校教育学校教育学類附属特別支援学校
10:50～	⑤ 兵庫県立淡路高等学校
11:00～	⑥ 高知県立大方高等学校
11:10	休憩 《20分》
11:30	2018年度 実践団体発表② 司会：防災教育チャレンジプラン実行委員 金田 義行
11:30～	⑦ 目黒星美学園中学高等学校 ※発表1団体 10分
11:40～	⑧ 四国遍路の心でつなぐ防災教育研究会
11:50～	⑨ 学校法人自由学園 危機管理本部
12:00～	⑩ 上富田ふれあいルーム
12:10～	⑪ 新居浜市立金栄小学校
12:20	昼休憩 《60分》
13:20	2018年度 実践団体発表③ 司会：防災教育チャレンジプラン実行委員 佐藤 健
13:20～	⑫ 見てみよう！常総市の会 ※発表1団体 10分
13:30～	⑬ 川崎医療福祉大学 医療福祉マネジメント学部 医療福祉デザイン学科
13:40～	⑭ 高森東学園義務教育学校
13:50～	⑮ 球磨村教育委員会
14:00～	⑯ 「災害に強い街づくり大綱」実行委員会
14:10	休憩 《20分》
14:30	サポーター認定証授与・記念撮影 防災教育チャレンジプラン実行委員 瀧川 猛
14:50	2019年度 実践団体ポスターセッション 司会：防災教育チャレンジプラン実行委員 栗田 暢之
14:50～	2019年度実践団体ポスターセッション説明
14:55～	2019年度実践自己紹介 ※発表1団体 1分
	① 名古屋市立工芸高等学校 都市システム科
	② 高知県立大方高等学校
	③ 目黒星美学園中学高等学校
	④ 岡崎市立常磐東小学校
	⑤ 立正大学地球環境科学部 教育工学・学習科学研究室
	⑥ 被災地を写真でつなぐ実行委員会
	⑦ 京都市立正親小学校
	⑧ 新居浜市立金栄小学校
	⑨ ミラクルウィッシュ
	⑩ 北海道標津高等学校
	⑪ 愛媛県立宇和島東高等学校
	⑫ 新潟市立白南中学校
	⑬ NPO法人小網代野外活動調整会議
	⑭ 京都府立鴨沂高等学校
	⑮ UR都市機構
	※終了後2階展示会場に移動
15:20～	2019年度実践団体ポスターセッション(コアタイム) ※団体を2グループに分けて、前半(団体番号・奇数)と後半(団体番号・偶数)で各30分発表を行う
16:20	休憩(3階本会場に移動) 《15分》
16:35	2018年度 防災教育チャレンジプランの表彰・記念撮影・講評 防災教育チャレンジプラン審査委員長 渡邊 正樹
16:55	閉会挨拶 防災教育チャレンジプラン実行委員長 林 春男
17:00	閉会
17:00～17:10	2019年度実践団体 説明会 (各団体より1名参加)
17:30～19:00	情報交換会 (2階ラウンジ)

※14:50より、別会場にて2018年度防災教育チャレンジプラン審査委員会を開催



## 2018年度実践団体の紹介

### ① 川口市立鳩ヶ谷中学校 / 埼玉県川口市

地域住民と合同で防災訓練を実施するなど防災の取組みを通して、学校・家庭・地域の連携強化をより一層図る。市の防災課と消防局の指導の下、生徒が地域の高齢者を連れて避難する訓練等を行う。また、生徒が地域で自主的に防災に取り組めるよう市の防災リーダー認定講習会を受講し、防災への意識を高める。さらに、生徒の防災に対する意識を高めるために道徳の授業を行い、命を大切にす教育を推進する。

### ② ESDまちプロジェクト防災応援隊～学校防災活動拠点事業(大田区立南六郷中学校)～ / 東京都大田区

[目的]

- 大田区及び六郷地区地域防災と地域医療体制の充実を図る。
- 防災：医療との関連を重視し傷病者を実際に運ぶことで、さらなる課題を見いだす。

[おもな特徴]

- 傷病者等を実際に救急医療施設までリアカー、車イス等で移送する。  
移送は往復約2.5キロ(1時間)。
- 蒲田消防署、町会消防団と連携を図り、高校生・中学生による「D級放水体験」を実施。
- 都立六郷工科高校生ボランティアとも連携を図った。

### ③ ライフデザインイノベーション研究会 / 広島県広島市

1. 実施対象者の共生・人の多様性視点を育み、社会の中の多様な人々のニーズへの理解を深めることで、被災者のイメージを広げる。
2. 家庭生活および社会生活を営む立場から当事者意識をもって災害について考えられる人を育てる。
3. 災害対策を被災者視点(防災)と被災者支援視点(減災)の両方から捉え、行動できる人を育てる。

### ④ 金沢大学人間社会学域学校教育学類附属特別支援学校 / 石川県金沢市

3年前から保護者と協力し、学校防災委員会を設置して震災時の対応について取り組んできたが、地域と連携した防災の取り組みに課題がある。学校近隣住民と共に災害時の対応について知識を深め、実際の行動に活かせる取り組みを進めたい。また、知的障害がある子どもたちが、自らの安全を確保することに役立つ防災学習や訓練について検討する。これまでの地域協働型の学習に防災関連の内容を取り入れていく。

### ⑤ 兵庫県立淡路高等学校 / 兵庫県淡路市

総合学科の特色をいかした体験的な学びで身につけた成果を、広く地域に発信し、本校生徒が主体となった地域防災活動の実現を目的としています。プラン名のARCH(アーチ)は、「Awaji…淡路 Region…地域 Connectivity…つなぐこと High School…高校」の頭文字を使ったものであり、淡路市の象徴である明石海峡大橋のように、本校生が地域と地域を結びつける架け橋のような存在になることを目指しています。

### ⑥ 高知県立大方高等学校 / 高知県黒潮町

このプランの特徴は、これまでの津波避難訓練中心の防災教育とは異なる、避難生活を視野に入れた防災教育です。本校は南海トラフ地震発生の際、地域の避難所に指定されていますが、これまで避難所運営に関する防災教育は行っていませんでした。自分たちの学校が避難所になるという視点から、地域の防災について考えていくことで、より積極的で発展的な防災教育を目指します。またこの実践は、地域の防災活動の活性化にも貢献できると考えています。



**⑦ 目黒星美学園中学高等学校 / 東京都世田谷区**

1. 生徒が楽しく主体的に取り組み、卒業後も活かせる（生涯忘れない）防災教育の教材の作成と実践を行う。
2. 生徒が想像力を活かして自ら選択肢を考え、災害時に応用できる判断力を身に付けられる防災教育を目指す。
3. 生徒のアイデアや提案を実際の地域防災に活かしてもらうことを目指す。
4. 学校内の教員間の連携と共に、学校外との連携を深める。
5. 防災教育にどのように取り組むべきか悩んでいる教員のヒントになる取り組みを目指す。

**⑧ 四国遍路の心でつなぐ防災教育研究会 / 香川県高松市**

少子高齢化が急速に進んで、間もなく人口の4割が高齢者になろうとしている四国地域の悩みは深い。多くの企業が大手の傘下に吸収されて、物流は本州からの瀬戸大橋頼み、人口減による財政逼迫、追い打ちをかける「東南海トラフ地震」「中央構造線由来の地震」などに対して、行政頼みにせず、住民自らが自分たちでできることはきちんとやっておいて、最悪の事態を回避しようとする取り組みである。

**⑨ 学校法人自由学園 危機管理本部 / 東京都東久留米市**

このプランでは、使用されている学習教材が、自社の防災活動用として企業が開発したものであるという点に特徴があり、学校が企業と防災に関して業務提携し、協働して活動に取り組んでいることも新しいチャレンジだと言えるだろう。この「そなえるカルタ」を使った学習を通して、生徒たちの防災意識が涵養され、それが自らの日頃の備えへと具体化されること、また家族の防災力向上にも寄与することを期待している。

**⑩ 上富田ふれあいルーム / 和歌山県上富田町**

上富田ふれあいルームでは、毎月の季節の行事に、防災に必要な知識と体験を取り入れることで、自然に楽しく、防災を学べる計画をたてています。実際の災害時に自分たちに何ができるかを、具体的に考え行動できる、避難所では要配慮者に気づき、声をかけることができる小学生を目指します。和歌山県ならではの防災プランを実施中。今年度は今までの約 110 種類の活動を誰でも実践できるようにマニュアル化したいと思っています。

**⑪ 新居浜市立金栄小学校 / 愛媛県新居浜市**

【目的】

- 1 平成 16 年に新居浜市金栄校区で発生した台風災害による被害体験を次世代に継承させ、平成 16 年災害を風化させない。
- 2 自分の命を守り、自助共助で生き抜くことを身に着ける。
- 3 自然災害が発生した際に備え、「命を守る防災」について知識の習得を図る。

【特徴】

- 1 自然災害から得た教訓をもとに小学生の防災力の向上を図り、命の大切さを学ぶ。
- 2 地域の危険箇所等を e 防災マップなどに反映し、地域で情報共有を図る。

**⑫ 見てみようよ！常総市の会 / 茨城県常総市**

2015 年 9 月豪雨による水害被害の記憶を風化させない被災地域の取組として、①水害体験の掘り起し ②語り部の発掘・育成 ③街の各所における洪水高の記録表示（洪水水位高ステッカー表示）を一体のプロセスとした「ステッカーツアーコース造成」を行う。市内外在住の一般や市内高校生が、市内洪水被災地域を取材し、“語り部”を掘り起こすとともに、当該地域の洪水時水位をマップ化、その後、ウォークツアーを実施運営する。

**⑬ 川崎医療福祉大学 医療福祉マネジメント学部 医療福祉デザイン学科 / 岡山県倉敷市**

NBC災害の際に、防護服を着た隊員が言葉に頼らず避難誘導を行うためのツール開発と、実際に現場での使用に耐えるデザインモデルの作製・検証を消防署と共同で行っていきます。その過程で大学生が防災に対しての知識を得ること、多職種連携による防災活動の意義を知ることが目的としています。

実際の消防隊員との共同開発により、現場のニーズを盛り込んだツールの開発が可能であることが特徴です。

**⑭ 高森東学園義務教育学校 / 熊本県高森町**

本校での従来の防災教育の内容をさらにパワーアップさせる。子どもたちが自分自身で考え行動できるようにするために、「防災・減災」に関する「学び」「体験」をもとに「地域に広げる」「思いを届ける」取組にする。その際、児童生徒・教職員・地域・保護者・公的機関等、それぞれの立場（5レンジャー）で考え合いながら防災・減災を展開する。

内容として

- ① 地域の災害の特性(火山・地震等)についての学び・防災訓練の実施
- ② 自立自衛的な避難所体験（運営を通して共助を学ぶ）
- ③ 地域への啓発活動の実施

**⑮ 球磨村教育委員会 / 熊本県球磨村**

1 目的

- ・小中学生や教職員が本村の地形の脆弱性や想定される災害のリスクを知り、現在の村の防災の取組みを知ること。
- ・小中学生が地域の大人とともに、村民として、災害に強い地域づくりの担い手となり、地域全体の防災意識や防災力を高めること。

2 特徴

- ・防災訓練等についての小中連携及び小中学生の村民性意識の高揚
- ・村民防災会議や球磨川水害タイムライン等への小中学生・教職員の参画
- ・学校の避難所運営の在り方の検討

**⑯ 「災害に強い街づくり大綱」実行委員会 / 千葉県大網白里市**

FMBとは飯田市で実践されている災害時において誰でも迅速・確実な初動期のオペレーションを実現するツール。

東日本大震災が発生し、防災の重要性を考えていたところ、FMBを知り、当地域でも実施したいと思った。大網地区を防災協力拠点とし、FMBを作り、減災に繋げるチャレンジをする。

この取り組みが地域防災（共助）の様々な課題解決に資することができれば、全国に普及されたいと信じ良いものを作ってまいります。

MEMO



## ① 川口市立鳩ヶ谷中学校

プラン名

鳩ヶ谷中学校区防災対策チャレンジプラン 2018

プランの対象

中学生

所在地

埼玉県川口市

### ープランの目的・ここがポイント！

- 防災の取組を通して、より一層、学校・家庭・地域の連携強化に努める。
- 学区内小学校との連携を通して家庭・地域との連携を推進する。
- 実践的な避難訓練を行うなど、災害時の対応に向けた活動を蓄積する。

### ープランの概要

地域住民と合同の防災訓練や小学校との合同引き渡し訓練を通して、学校・家庭・地域の連携強化をより一層図る。市の防災課と消防局の指導の下、本校が避難所になったことを想定した訓練を行う。また、生徒が地域で自主的に防災に取り組めるよう市の防災リーダー認定講習会を受講し、防災への意識を高める。

### ー期待される効果・ここがおすすめ！

これまでは、生徒が学校にいる時間帯を想定した訓練（学校内のみ）を行ってきた。しかし、災害はいつ起きるかわからない。想定があてはまらないことも多いため、臨機応変な対応が必要である。自分の命を第一に守るとともに、地域住民を助ける存在となることができる。そのためにも、自分たちが住んでいる地域について詳しく知ることにより、災害時に対応できるようになる。

### ー成果として得たこと

- 避難訓練等や被災地訪問といった防災教育を実践したことで、生徒の防災に対する意識が高まってきた。また、被災者を助けるためには自分の命は自分で守らなくてはならないという思いも強まってきた。
- 市の防災リーダー認定講習を受講したことで、災害が起きた際には、自分たちが地域の住民を助けていかななくてはならないという意識が高まり、進んで、地区の合同防災訓練に参加する生徒が増えた。



### ー全体の反省・感想・課題

- 本校において、地区の中学校と合同で市の防災リーダー認定講習を実施したが、地域の他の学校との連携が不可欠であるので、今後も合同で実施できる活動を考えていく必要がある。
- 地域住民と共に「自助・共助・公助」ができる生徒の育成に向けて、地域と協力しながら、防災教育を進めていかななくてはならない。

### ー今後の継続予定

「天災は忘れた頃にやってくる」という諺にあるとおり、いつ起こるか分からない。だからこそ、防災教育は重要な教育課程の一環として位置付けられる。そして、地域の中学校として、中学生が自分の命を守ることは勿論のこと、地域の住民を助けていくことができる力を身につけていくことが強く求められる。

今後も、「防災リーダー認定講習」や地域住民と合同の防災訓練や小学校との合同引き渡し訓練を実践し、もしもの時のために備えられる力を持った中学生の育成に取り組んでいかなければならない。



## ② ESDまちプロジェクト防災応援隊 ～ 学校防災活動拠点事業（大田区立南六郷中学校）～

プラン名

「地元町会・自治会と連携した防災訓練」  
～防災フェスタから見えた課題とは～

プランの対象

中学生

所在地

東京都大田区

### ープランの目的・ここがポイント！

- ・前年に実施した防災フェスタを、地震想定から水害想定に変更し、近隣町会及び自治会と連携して実施。
- ・中学生による地域防災ボランティア隊「南六郷中レンジャー隊」を組織し、地域の防災訓練に積極的に参加し呼びかけを行うことで、防災フェスタの課題となった中堅世代（30～40代）の訓練参加を促す。

### ープランの概要

- ・全校集会や学校だより等を活用した「南六郷中レンジャー隊」の募集。
- ・上級救命講習受講やD級ポンプ消火訓練参加による南六郷中レンジャー隊員のスキルアップ。
- ・南六郷中レンジャー隊と地域町会、自治会による風水害時のハザードマップ作成及び地域防災訓練への参加と防災フェスタ呼びかけ。
- ・水害を想定した防災フェスタの実施。

### ー期待される効果・ここがおすすめ！

- ・南六郷中レンジャー隊の活動や防災フェスタを通して、全校生徒の防災に対する意識の高揚や地域住民や保護者と連携した防災活動の充実を図ることができる。
- ・地震や火災だけでなく、風水害に対する防災について理解を深めることができる。

### ー成果として得たこと

- ・6月までに1年生9名、2年生8名、計17名（全校生徒数597名）の南六郷中レンジャー隊員を集うことができ、17名の全隊員が上級救命講習の資格取得や消防隊の方々によるD級ポンプ操作指導、地域の防災訓練参加を通して、自尊感情を高め、地域防災リーダーの担い手としての意識を高めることができた。また、南六郷中レンジャー隊の活動をHPや学校だより等で紹介することで、全校生徒や保護者の防災意識を高めることができた。
- ・南六郷中レンジャー隊と地域町会、自治会の防災担当者による風水害ハザードマップを作成したことで、大田区より提供されているハザードマップ以外に注意を払わなければならない危険箇所があることが分かった。また、過去の風水害について知ることができた。

### ー全体の反省・感想・課題

- ・防災フェスタの中堅世代参加について、前年よりは参加数が増加したが、まだまだ地域防災活動は高齢者の方々に頼るところが多い現状である。
- ・南六郷中レンジャー隊の防災スキルを高めるための訓練機器の経費確保や防災訓練引率等の人的手当が課題である。

### ー今後の継続予定

- ・南六郷中レンジャー隊の活動について、来年度は今年4月当初から組織的に生徒の募集を行い、中学生防災リーダーの育成を図りたい。
- ・中堅世代の防災訓練参加には、地域との連携だけでなく、PTAを核とした保護者と計画的に協議を進めていく必要性を感じた。また、風水害を想定した訓練では、地震想定とは違う新たな課題も明らかになった。引き続き、課題を改善しながら防災訓練を継続したい。



### ③ライフデザインイノベーション研究会

**プラン名** 多様な人々のニーズに配慮できる減災教育プランと教材開発

**プランの対象** 高校生

**所在地** 広島県広島市

#### ープランの目的・ここがポイント！

1. 家庭科の授業を通して高校生の共生・人の多様性理解、ユニバーサルデザイン視点を育み、社会の中の多様な人々のニーズを想像できる市民を育てる。
2. 家庭生活および社会生活を営む立場から、当事者意識をもって自然災害について考えることができる人を育てる。
3. 災害対策を被災者視点（防災）と被災者支援視点（減災）の両方から捉え、主体的に行動できる人を育てる。

#### ープランの概要

- ユニバーサルデザイン（以下、UD）学習と減災学習のセットプランである。
- 避難所における二次災害（災害関連死：以下関連死とする）に注目させることで、生徒が家庭や学校に留まらず、地域の人々の生活や社会環境へも目が向けられるようにする。
- UD学習により「共生・人の多様性」への理解を深めた生徒が、UD視点を活かして避難所をデザインする。

#### ー期待される効果・ここがおすすめ！

- 自然災害において想定外は起こりうることの理解と、防災意識の高揚
- 避難所生活の実態理解と、減災意識の高揚
- 高校生が避難所運営・支援者となる（なれる）可能性の高まり

#### ー成果として得たこと

協働（グループ活動）と対話（発表）を中心とした活動から、一定の成果が示唆された。

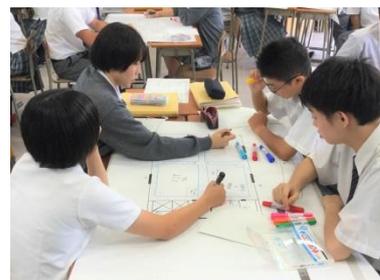
1. **減災授業1時間目「防災・減災について考えよう」**の授業の感想から
  - 約7割の生徒が、自然災害や避難所、関連死について理解できたことが明らかになった。
  - 災害を身近に感じた生徒、備蓄などの対策をする必要性を理解した生徒、支援について主体的に考えられた生徒が、それぞれ2割いることが確認できた。
2. **減災授業2時間目「避難所をデザインしてみよう」**の授業の感想から
  - 避難所生活の実態にふれた生徒、避難所デザインに難しさを感じながらもより多くの人が安心・安全に過ごせるよう真剣に取り組んだことが窺える生徒が、それぞれ約半数いることがわかった。
  - 2割以上の生徒に、視野の広がり・共生意識の高まりがみられた。
  - **他のグループの発表を受けて**、約6割の生徒が他班の多様な人に配慮する具体的なアイデアに関する記述をし、4割以上の生徒がクラスメートの発想のすごさを称える記述をした。移動・アクセスのしやすさ、情報共有の手段などのアイデアにふれた生徒は計6割以上いることがわかった。

#### ー全体の反省・感想・課題

課題：UD授業・減災授業のポイントがより理解しやすい内容になるよう、プラン・手引書を修正する必要がある。

#### ー今後の継続予定

上記課題を解決するとともに、作成したリーフレットを活用し、より多くの高校が防災・減災授業への関心を高められるよう活動を継続する。また、共同研究協力校を増やして継続研究を行い、その結果を学会等で公表したい。





## ④金沢大学人間社会学域学校教育学類附属特別支援学校

**プラン名** 地域の人と楽しみながら学ぶ防災学習

**プランの対象** 小学生～高校生

**所在地** 石川県金沢市

### ープランの目的・ここがポイント！

知的障害がある児童生徒が主体的に、他者との関わりを楽しみながら学ぶ防災学習の在り方を探る。防災学習を通じて学校・保護者と地域とのつながりを作り、児童生徒、教員、保護者、地域住民の防災意識を高めるプラン。

### ープランの概要

- ・小学部、中学部、高等部それぞれに防災学習を構想し取り組む。中学部・高等部においては防災をテーマに、地域住民と交流および共同学習や協働学習を行う。
- ・学校と保護者が協力し、地域住民も参加できる講習会や研修会を実施する。

### ー期待される効果・ここがおすすめ！

- ・知的障害教育における防災学習の事例を集積することで学習内容やノウハウを提供できる。児童生徒の災害や避難に関する知識と対応力が高まる。
- ・学校、保護者、地域住民がつながると共に、防災意識を高めることができる。

### ー成果として得たこと

- ・小学部18、中学部24、高等部10の、合わせて52の単元（題材）で防災学習を実施した。特に中学部では地域の園児や小学部児童に、学んだことを交流および共同学習で伝える学習を行えた。高等部では地域住民と共に防災研修センターでの災害体験や災害時の調理など地域住民と協働することができた。これらの活動を整理し、次年度の教育課程に位置づけるための試案を作成できた。
- ・防災学習の評価を元に、個々の児童生徒の防災に関するアセスメントが行えた。
- ・学校と保護者が協力して、地域住民も参加した防災講演会、防災研修会を実施した。そのことにより、地域住民とのつながりが深まり、それぞれ防災意識が高まった。

### ー全体の反省・感想・課題

事業を受託して取り組んだことにより、各所で積極的に防災学習に取り組むことができた。また、初めて地域住民と一緒に災害時の対応を考える活動を行うことができた。

これまでよりすいぶん取り組みの前進があったが、震災時の学校の具体的な対応の方策、準備は不十分のままである。

地域住民とのフォーマルな協議の場を作ることもこれからの課題となっている。

### ー今後の継続予定

防災学習を教育課程に位置づけて実施する。  
個々の児童生徒の防災に関する実態票を作成する。  
学校、保護者、地域住民が連携した防災研修会を実施する。



## ⑤兵庫県立淡路高等学校

## プラン名

淡高 ARCH プロジェクト  
～高校生が主体となった地域防災の取り組み～

## プランの対象

高校生

## 所在地

兵庫県淡路市

## ープランの目的・ここがポイント！

総合学科の特色をいかした体験的な学びで身につけた成果を地域に発信し、本校生徒が主体となった地域防災活動の実現を目的としている。プラン名のARCH（アーチ）は、「Awaji…淡路Region…地域Connectivity…つなぐことHigh School…高校」の頭文字を使ったものであり、淡路市の象徴である明石海峡大橋のように、本校生が地域と地域を結びつける架け橋のような存在になることを目指している。

## ープランの概要

各系列がそれぞれに地域住民と連携をとりながら防災の要素を含んだ体験・交流活動を行う。その集大成として、1月17日に地域住民と共に総合防災訓練を実施する。

- ・北淡震災記念公園開園20周年のイベントにおいて、本校オリジナルの震災語り継ぎsong「ここに」の手話と合唱の披露。（ライフサポート系列）
- ・「めぐみ市」の際に、商品を購入していただいた地域住民の方々に防災マップを配布。（めぐみ系列）
- ・校外学習の際に、地域住民に防災・減災に関する本校オリジナルキャラクター「チンげんさいくん」を使用した缶バッジ並びに防災検定を配布し啓発活動に努める。（まなび系列）
- ・「淡高サロン」において、防災グッズの作成や非常食づくりを行う。（ライフサポート系列）

## ー期待される効果・ここがおすすめ！

- ・普段から行っている地域交流活動に防災の要素を加えることによって、負担感を少なく気軽に防災活動に取り組むことができる。

## ー成果として得たこと

- ・地域のさまざまな年代の人たちと関わることによって地域を身近に感じ、地域を愛する心が芽生えた。また、自己有用感の高まりによって、社会に積極的に関わる主体性が育まれた。
- ・地域と連携した総合的な防災訓練を実施し、避難所シミュレーションや防災・減災を図る方法を体験することによって、地域の防災意識や対応能力が高まった。

## ー全体の反省・感想・課題

淡路高校の防災教育は「防災と心のケア」という学校設定科目の選択者が中心となって実践してきたが、2018年度はARCHプロジェクトにより、防災教育に関わる生徒・教員が増加した。その結果、地域との連携がより深まり、災害時に必要な普段からの信頼関係を築くことができたと感じる。

しかしながらその一方で、ARCHプロジェクトが今年度からの取り組みであったため、事前準備や地域との日程調整などうまくいかないことがあった。特に調理系列に関しては、地域との交流活動を持つことができなかったことが課題である。



## ー今後の継続予定

今後も普段から行っている地域交流活動を軸として防災教育活動を進め、専門性にとらわれずに、また実践するにあたって生徒や教員の負担感が少ない長く継続できる防災教育活動を進めていきたい。さらに他の高校や団体にも活動できるプランとして、さまざまな機会を通じて実践報告・発表を行い、防災教育の草の根活動をしていきたい。



## ⑥高知県立大方高等学校

プラン名 高校生が作る「地区防災計画」

プランの対象 高校生

所在地 高知県黒潮町

### ープランの目的・ここがポイント！

これまで行われてきた津波避難訓練中心の防災教育から、被災後の生活のことを意識した新しい防災教育の展開を目指したプランである。従来の命を守るための避難訓練は変わらず大切に、それに加えて生徒がより主体的に考え学ぶ活動にすることを重要視した。

「大方高校オリジナルHUG」(以下「オリジナルHUG」)の作成と実践を通して、地域の方、被災地の高校生、防災の専門家など沢山の人のつながり、その関わりのなかで多くのことを学ぶことができる。高校生が地域を知り、地域に貢献する喜びを知ることもこのプランの目的である。

### ープランの概要

- ・「オリジナルHUG」作成。
- ・防災関係者や地域の方と連携し、「大方高校オリジナルHUG」の実践をする。
- ・避難訓練に加え、炊き出し訓練など生徒が主体的に学ぶ場をつくる。
- ・地域の方や近隣の小・中学生と、防災の取組を通じて交流する。

### ー期待される効果・ここがおすすめ！

- ・「オリジナルHUG」作成を通して高校生が被災時のことについてイメージし、地域のことについて考えることができる。
- ・地域の方や近隣の小学校中学校との連携強化、地域の防災意識向上に貢献することができる。
- ・地域の防災に貢献することによる、高校生の自己有用感の向上が期待できる。

### ー成果として得たこと

- ・「オリジナルHUG」を形にし、防災関係者や地域の方と実践をすることができた。
- ・オリジナルHUG実践を通して、大方高校の避難所としての課題点、大方高校避難所運営マニュアルの問題点などを生徒が発見することができた。
- ・地域の方と役場の方と全校生徒と教職員で、初めてのオリジナルHUGを用いた避難所運営訓練を開催することができた。今後も改良を重ねて継続させていきたい。
- ・オリジナルHUG作成に取り組んだ「地域学」受講者や生徒防災委員を中心に、主体的に取り組むことによって生徒の防災意識が向上した。
- ・防災を通して学校外の人と関わることで、防災に取り組むことに対して生徒に自覚や責任感が生まれた。
- ・地域に貢献することや、防災の知識をつけることを通して、生徒の自己有用感が向上した。
- ・津波避難訓練に加え、生徒が企画をして炊き出し訓練を行った。被災時のことについて考える良いきっかけとなり、学校行事として定着させることができると思われる。

### ー全体の反省・感想・課題

- ・地域の方と協働して防災計画を作っていくことを目指して活動したが、今回は一部の住民の方との連携にとどまった。今後、高校生が積極的に働きかけ、更に連携を進めていきたい。

### ー今後の継続予定

- ・高校生の出前授業や、協働しての防災活動などを通して、近隣の保育園・小中学校との交流・連携を進める。
- ・「大方高校避難所運営マニュアル」の改善を実現するため、改訂案をまとめて町や県に提案する。



## ⑦目黒星美学園中学高等学校

## プラン名

生徒が活躍する「わくわく防災減災」—生徒の自助力を高めて、地域と連携する私立学校のモデルケースを目指す—

## プランの対象

中学生～大学・一般

## 所在地

東京都世田谷区

## —プランの目的・ここがポイント！

「災害はいつ起こるか分からないので、目の前にいる生徒の防災意識を短期間で変えたい」という願いから本校の防災教育はスタートした。本校の防災教育の方針であり、本プランの合言葉が「わくわく防災減災」である。生徒も教員も前向きな気持ちで防災に取り組むことで、災害と向き合い、想像力を広げ、持続性ある防災意識が身に付く。防災を「教えられる側」になりがちな生徒が、「教える側」に立ったとき、生き生き防災について考え始める。以上が、本プランの目的であり、ポイントである。

## —プランの概要

1. 「学びの『社会還元』」(\*)で、「生徒」の防災意識を変える。  
 ※授業等での学びを活かして、生徒たちが女子中高生ならではのアイデアを出し合い、それが実際の社会の中で役立つ経験をする。…というチャンスが防災にはたくさん！  
 例) 災害時のトイレ問題の啓発、母子避難所の提案、女子中高生も取り組みたくなる防災の提案
2. 私立学校が、防災を軸に、「地域」との連携を広げる・深める活動を校内外で展開する。
3. 「先生」をターゲットにした防災研修(=防災に取り組む意識を心から高める)の企画を行う。

## —期待される効果・ここがおすすめ！

「わくわく防災減災」の実践を通じて、生徒たちは学力の三要素を伸ばしながら、防災意識が高まります。生徒たちが防災を通じて成長する姿は、防災教育に取り組む教員の何よりの楽しみにもなります！

## —成果として得たこと

- 生徒たちが学びを活かして話し合った行政や専門家の前で、防災のアイデアを発表することで、自助意識が育つと共に、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力を伸ばした。発表するという目標の下、どの生徒も生き生きと活動に取り組んだ。
- イベントを通じての交流や地域防災上の協議を通じて、特に地域行政・地域住民と大いに話し合ったり、協力し合ったりすることで、連携を深めることができた。
- 生徒対象の授業に加え、生徒以外を対象とした防災に関する研修会や講演会に関わる際、相手(受ける側)のニーズに合わせた企画が実施できた。

## —全体の反省・感想・課題

実践団体として、これまでの実践を発展させたり、新しい活動にチャレンジしたり、たくさんの実践を実現できた。その分、時間が足りないこともあったが、「わくわく」しながら、防災の輪を地域に広げ、生徒自身の成長に繋がった。

「防災意識を変えるには、どうしたら良いか分からない」「なぜ、こんなにうまくいかないんだろう…」といった悩みや試行錯誤の中で、少しずつ見出した防災教育なので、「防災教育、どうすれば…」と思っている教育現場のヒントになるのではないかな(なれば良い)、と期待している。



## —今後の継続予定

今年度、実施したプランのほぼすべてを継続・発展させる予定である。今年度の経験を踏まえて、より良い実践にしていきたい。情報の共有や取り組み方法の一般化(誰でも実践できる・実践してみたくなる)していきたい。(※写真は、生徒が防災科学技術研究所でプレゼンテーションしている様子)



## ⑧四国遍路の心でつなぐ防災教育研究会

**プラン名** みんな集まれ この指とまれ 防災の輪っ II

**プランの対象** 大学・一般

**所在地** 香川県高松市

### ープランの目的・ここがポイント！

全国に10年先んじて高齢化が進む四国地方において、巨大なハザードに対峙する時に防災の支援者たる担い手がほとんどいないところに着目。高齢者自身が自らの自尊感情を高め、自らの命を守るための意識の高まりのためのコンピテンシーを育成するための、アプローチの仕方について社会的実験を含めた取り組みを展開した。特に高松市社会福祉協議会とのコラボは異色だったが極めて有効。

### ープランの概要

大人も子供も楽しく学べる「防災教育コンピテンシーの開発」をめざす。民間、各種団体、自治会、青年会議所、社会福祉協議会、研究者、行政の支援等が緩やかに無理なく繋がる、生涯学習としての「研究コンソーシアム」の提案である。

各種団体や行政が、無理なく緩やかにつながる「研究コンソーシアム」として、また「生涯学習」として幅広い世代が楽しく学べる展開とした。①インバウンド、在日外国人労働者に向けた現状と防災教育観の発信(県観光振興課等とコラボ) ③都市部のマンション乱立・高齢化対応の提案(「避難しない避難」の選択肢の提案と取り組み) ④楽しく学べる仕組みの提案(「防災フェス in サンポート高松」の開催) ⑥過疎化・高齢化する地方防災の在り方を考える。

### ー期待される効果・ここがおすすめ！

科学的根拠や歴史に基づいて推進する「1キロメッシュの防災」。広域で成し得なかった仕組み作り。

### ー成果として得たこと

- ・人口減少と高齢化により、孤立せざるを得なかった四国最北端の町で、高齢者自身が高い志をもって防災に取り組めるようになったこと。
- ・マンション防災では、これまで防災には取り組めていなかったマンションが動き出し、そこを中心に地域コミュニティの自主防災会や、林立する他のマンションへの良い意味での波及効果がみられるようになったこと。
- ・社会の色々な組織や立場の人たちが、無理強いをすれば離反するので、緩やかに綱がけるコンソーシアムとしての組織を試行し、それなりの成果をあげられたこと。
- ・「老老支援」が現実になっている地方防災において、在宅避難を「避難しない避難」として提案し、地域理解を得たこと。
- ・メディア各社とうまく協力関係が構築できて、われわれの取り組みが、より多くの人の議論の対象となりえたこと。

### ー全体の反省・感想・課題

関係各団体に心から感謝したいこと。ただ、これが単発に終わることなく、継続性をもって発展し続けてほしいと願う。

### ー今後の継続予定

- ・社会福祉協議会を、防災教育を推進していく中で、生涯学習の核としてかわりあうこと。
- ・瀬戸の島々に、未来に生きる人への防災のヘリテージとして、果樹を植えること。



## ◎学校法人自由学園 危機管理本部

プラン名

「そなえるカルタ」で防災を学ぶ～防災教育で企業と協働～

プランの対象

高校生

所在地

東京都東久留米市

### ープランの目的・ここがポイント！

これまで本校では、学習者が学習の結果として、防災を“我が事化（個人の行動へと具体化）”するような学習形態を模索してきた。その中で、昨今教育現場へ導入が進められているアクティブラーニングに着目し、そこで活用できる教材として「そなえるカルタ（三菱地所レジデンス（株）が自社の防災活動用に制作）」を取り入れてきた。今回のプランでは、その「そなえるカルタ」を軸とした学習の成果を定量的に捉える共に、どのような“我が事化”に結びついているのかについても検証した。併せて、学校と企業とが、防災活動で同じ目標へ向かって協働できるという事例報告にもなれば幸いである。

### ープランの概要

- ・「そなえるカルタ」を使った防災学習会の実施。
- ・補助教材として「そなえるドリル（本校が三菱地所レジデンス（株）などと協働で制作）」の学習過程への導入。
- ・「防災意識尺度（防災科学技術研究所）」を使ったアンケート調査の実施および学習効果の検証。

### ー期待される効果・ここがおすすめ！

今回の学習形態による効果が分かることで、対象者や学習の狙いに応じた利用方法が可能になり、より適切な学習機会の提供に繋がることが期待できるだろう。また一方で、「そなえるカルタ」を軸とした学習ではカバーできない部分も明らかになることから、学習目的に応じて他の教材を柔軟に組み合わせながら、より広範囲な学習、あるいはより細やかな学習へと展開できる可能性が期待できる。

### ー成果として得たこと

- ・防災学習会の前後で実施したアンケート調査からは、男女共に「被災状況に対する想像力（災害が起きたらどんなことが起きるか、何が必要か、何をするかを想像する力）」、「災害に対する危機感（災害をどのくらい深刻に捉えているか、現状ではまずいと思っているか）」、「他者志向（社会や人のために何かをしようと思う心）」という三つの項目で、事後の得点が伸びかつ平均を上回るという結果が得られたことから、この学習形態が及ぼす肯定的な影響の範囲を推察することができた。
- ・防災学習後には、「家族と災害時のことについて話し合いを持った」、「非常持ち出し袋の内容を見直した」、「家庭の防災用品を補充した」という“我が事化”を行った生徒が見られた。
- ・三菱地所レジデンス（株）では、「防災を“やる人”と“やらない人”が二極化する現状」、「災害時、中高生に活躍してほしいがマンション防災ではそこの接点が無い」という課題を抱えており、本校との協働の機会は、その解決の糸口が得られる場となっているようだ。

### ー全体の反省・感想・課題

今回は「そなえるカルタ」での学習の中に、試みとして、「そなえるドリル」を補助教材として導入してみた。一度学習者へ学びを戻す過程が加わったことで、“我が事化”が進みやすくなったのではないかと推察する。「そなえるカルタ」と「そなえるドリル」は、現在共にダウンロードフリーで利用できる。是非多くの方々に使っていただきたい。またこの機会を通して、学校と企業とが同じ目標へ向かって取り組めること、更にはそれをwin-winの関係へと発展させられることも示せたと思う。



### ー今後の継続予定

現在三菱地所レジデンス（株）とは、新しい協働について、具体的な話し合いを進めている。



## ⑩上富田ふれあいルーム

**プラン名** 完成版 上富田ふれあいルーム 防災年間計画！

**プランの対象** 小学生

**所在地** 和歌山県上富田町

### ープランの目的・ここがポイント！

「防災は特別なものではなく、当たり前なもの」毎月の季節の行事に、防災に必要な知識と体験を取り入れることで、自然に楽しく防災を学ぶ。

災害時に「衣・食・住・要配慮者へ声をかけることができる小学生」を目指す。

### ープランの概要

美しい季節に彩られた日本。毎年繰り返される季節の行事に、ちょっとだけ「防災」を取り入れてみませんか？

誕生日や特別な日に、「おめでとう」「ありがとう」だけでなく、何か災害があっても、絶対に生き残り、再会できるように大事なことを確認し合いませんか？

和歌山県ならではの防災に役立つ取り組みを知り、自分の住む地域とつながり、誇りを持ち、もっと好きになりましょう。

12年間の防災教室のプログラム160種をまとめたマニュアル「季節のイベント防災カレンダー(季節の行事で学ぼう災!)」を製作します！

### ー期待される効果・ここがおすすめ！

「防災」を「勉強」ではなく、「遊び」としてとらえることで、楽しみながら学ぶことができる。

不便をマイナスとしてではなく、楽しみ、乗り越える力をつけることで、災害時に「何とかする」強い精神と実行力を養う。

### ー成果として得たこと

- ・地域の施設や団体、防災関係者、役場等と交流、連携を図ることができた。
- ・地域の住民、特に普段接点の少ない障害のある方との交流ができた。
- ・子ども達が防災に関心を持ち、自信が付き、自主的に動くようになった。
- ・防災を突き詰めていけばいくほど、普段の当たり前の心遣いや、食べる、寝る、遊ぶということが災害を防ぐだけでなく、生活すべてに深く関わりがあることが分かった。
- ・地域が元気になり、お互いに助け合いながら、与えられるものだけでなく、自分の力、仲間の協力で生きていくこと、これらが、すべて助け合い、防災につながっている。

### ー全体の反省・感想・課題

- ・今までにできなかったことをする&総まとめのつもりだったが、更に多くのプログラムを実践したくなり、時間不足の為それぞれのプランに十分な時間を取ることが出来なかった。

### ー今後の継続予定

- ・「防災は特別なものではなく、当たり前なもの」この言葉をモットーに、今後も、季節を感じながら「防災」という言葉ではなくても「生きる」事につながる遊びを企画、実践していきたい。
- ・自分の地域だけでなく、他の地域でも、少し工夫すれば使えるネタがたくさんあると思うので、どんどん活用してもらえたら嬉しい。
- ・他の地域との交流や連携も増やしたい。
- ・防災だけでなく「環境」「エコ」「食育」「福祉」「医療」「衛生」「地域」「連携」「海外」など、広く伝える活動に取り組む。



⑪新居浜市立金栄小学校

**プラン名** 自分の命は自分で守る。自助、共助で生き抜く。

**プランの対象** 小学生

**所在地** 愛媛県新居浜市

ープランの目的・ここがポイント！

- 1 平成16年に新居浜市金栄校区で発生した台風災害による被災体験を次世代に継承させ、平成16年豪雨災害を風化させない。
- 2 自分の命を守り、自助共助で生き抜くことを身に着ける。
- 3 自然災害が発生した際に備え、「命を守る防災」について知識の習得を図る。

ープランの概要

- 1 豪雨災害の被災体験から得た教訓をもとに、小学生の防災力の向上を図り、命の大切さを学ぶ。
- 2 地域の危険箇所等をe防災マップなどに反映し、地域で情報共有を図る。
- 3 松山地方気象台などの専門家を講師に招き、気象に関する情報、知識を習得するなど、防災への関心を持たせる。
- 4 西日本豪雨災害などの自然災害から命を守るため、地域特性を知り、命を守る防災活動へ展開させる。

ー期待される効果・ここがおすすめ！

- 1 災害から命を守るために必要なことを学び、自分の命を守るための知識を習得することを期待できる。
- 2 児童が1年間かけて学んだことを、保護者などへ情報発信することにより、家庭内での防災力向上につながる。
- 3 毎年、様々なテーマにより防災教育を継続することにより、地域の防災力向上を図ることができる。

ー成果として得たこと

- 1 気象予報官から、台風発生メカニズム、時間雨量の計測方法などの講話を聞いて、降水量と土砂災害、浸水被害がリンクしていることを知り、土砂災害などから身を守る大切さを知ることができた。
- 2 西日本豪雨災害において、愛媛県内で多数の人的、物的被害が発生したことにより、新居浜市でも同様の被害が発生する可能性があるため、早目に避難を心掛けること知り得たことにより、台風接近の際に早めの避難行動を行った。
- 3 防災まちあるきでは、小学生ならではの様々な目線や日頃の登下校などでまちを歩いているため、子供はまちをよく知っており、子供たちの指摘などが大人にとっては新しい発見となった。
- 4 防災教育を通じて、地域、学校、消防が協働し、児童及び教員と住民の関わりと繋がりを深め、住民との絆づくり、日頃から顔の見える関係づくりができた。

ー全体の反省・感想・課題

- 1 消防職員がメインで防災教育を進めているため、災害発生した際には対応が困難となる可能性があった。
- 2 西日本豪雨災害や台風の接近などにより、臨時休校が複数回あったため、予定どおりの日程で進めることができなかった。
- 3 中学校に進学後も、防災教育を継続する。

ー今後の継続予定

- 1 金栄小学校では、毎年5年生がテーマを変えながら防災教育を実施している。このことから、継続して防災学習に取り組み、地域全体の防災力向上を目的とする。
- 2 平成16年豪雨災害で甚大な被害を受けたことを風化させることなく、後世につなげていく。
- 3 地域外からの転入者が増加しており、土砂災害、浸水被害の可能性も高いことなどについて学校防災教育を通じて情報共有を図る。





## ⑫見てみようよ！常総市の会

**プラン名** 水害の記憶を未来につなげる『ステッカーツアー』運営

**プランの対象** 高校生～大学・一般 **所在地** 茨城県常総市

### ープランの目的・ここがポイント！

水害の記憶の風化を防ぎ“想定外”の発生可能性を常に共有していける“防災減災に鈍感にならない地域”づくりを推進する。「水害を記録にとどめない（痕跡を消し去る）復興」ではなく、「水害の記憶とともに生きていく復興」の実現のために、防災減災意識を高める目的を持つ。鬼怒川と小貝川に挟まれた常総市は古より水害常襲地帯であり、古い農家では納屋に船を吊ってあるなど、“備え”をしていた。このステッカーツアー準備段階では、コース造成メンバーチームが参加する形で、研究者の話を聴く「勉強会」も実施し、“水とともに生きてきた”地域の歴史を学ぶ。そのうえで、それらの知恵や教訓を伝えていくきっかけとして、まずは昨年9月の豪雨災害の記憶風化を防ぐ『ステッカーツアー』をスタディツアーとして確立する。これは、今後の、“市民防災力”向上のきっかけになるものである。

### ープランの概要

2015年9月豪雨による水害被害の記憶を風化させない被災地域の取組として、①水害体験の掘り起し ②語り部の発掘・育成 ③街の各所における洪水高の記録表示（洪水水位高ステッカー表示）を一体のプロセスとした「ステッカーツアーコース造成」を行う。これは市内外在住の一般や市内高校生による「ステッカーツアーコース造成チーム」が、市内洪水被災地域を取材し、当時の記憶を語っていただける“語り部”を掘り起こすとともに、当該地域の洪水時水位を聞き出し、それをマップ化、その後、多くのツアー参加者を集めたウォークツアー（語り部のもとを訪れ各ポイントに参加者で水位ステッカーを貼って歩く『ステッカーツアー』）を実施運営するものである。

### ー期待される効果・ここがおすすめ！

洪水水位のステッカーを街の（同意を得た方の）場所に貼るというシンプルな行動は水害の記憶の継承への意思を直接的に表せる行動である。賛否でてくるかもしれないが、それを含めて継承のムーブメントの契機になる。

### ー成果として得たこと

チャレンジプラン委員の方のコメントや、何より地域の他の方の助言もあり、2018年度はプリミティブな水害記憶継承にとどまらず、水害の背景となった地形把握を自転車ツアーで行う、街の復興状況を“発見”する（ウォークツアー）など、手法やテーマを変化させて、より広い層に受け入れられるよう試行した。水害の記憶の伝承の形は、まだまだ開発余地があり、それは単に教条的なスタンスだけでなく参加者の“楽しみ”の部分も多くして参加のすそ野を広げることが重要であるとあらためて認識した。

### 全体の反省・感想・課題

2018年度は高校生を巻き込んだ継承仕組みづくりについて重点的に取り組もうと申請案を出したものの、高校生の巻き込みは様々なハードルがあり、正直進めなかった。地元高校のボランティア部も活動方向性が合致せず、なかなか難しいと思知らされた。一方で地域から新たな参加者が加入するなど好材料もあった。

### ー今後の継続予定

上記のことから2019年度以降の、ステッカーツアーの形を変えながら、水害の記憶の継承とともに、地域を楽しみながら見つめるアングルでの取り組みを行い、少しずつ賛同者を増やしていくよう尽力したい。「被災の記憶そのもの」から「復興」や「復興に当たって尽力いただいたボランティアの顕彰」などに力点をずらしていく。これも水害を伝え続ける、広角的な視点である。そして最終的には、地域資源を楽しみながら水害と復興の歩みをたどれる常設コース「水害メモリアル回廊」を地域の参画者を得ながら構築していきたい。



⑬川崎医療福祉大学 医療福祉マネジメント学部 医療福祉デザイン学科

**プラン名** 言葉に頼らない避難誘導ツール開発プロジェクト

**プランの対象** 大学・一般

**所在地** 岡山県倉敷市

**ープランの目的・ここがポイント！**

1. 大学生が防災に対しての知識を得ることと、多職種連携による防災活動の意義を知る。
2. 災害現場での使用に耐えるデザインモデルの作製及び検討。
3. NBC災害の際に、防護服を着た隊員が言葉に頼らず避難誘導を行うためのツール開発。



**ープランの概要**

2016年、岡山市消防局 岡山市北消防署の隊員から「火事の現場で聴覚障がいを持つ方に、避難して欲しい事がすぐに伝わらなかった」と相談を受けたことから、災害時避難誘導用ピクトグラムの開発がスタートした。ピクトグラムは、2020年のオリンピックに向け、外国人や障がいを持つ方にも伝わりやすく有効な避難誘導のアイデアと考えている。開発にあたっては、定期的な打合せを行い、これまでに4度の消防訓練に参加して検証を行った。また、全国22の消防署からピクトグラムの使用に関する希望が寄せられており、さらなる検証の場が広がっている。

**ー期待される効果・ここがおすすめ！**

1. 消防隊員との共同開発・検証により、学生が得る実践的な学びと防災意識の高揚。
2. 防災訓練で消防隊員に実際に使用してもらい、検証・改善を行うことによって得られる現場のニーズに則したツールの開発。

**ー成果として得たこと**

1. デザインを学ぶ学生がピクトグラムを題材に消防隊員とのやり取りを通じて、実践的に防災に対する知識を学び、JIS規格やユニバーサルデザインの重要性について学修することができた。さらに、制作および検証を通じて自らの専門性の自覚に繋がる結果となった。
2. 屋外使用できるモデルとしてエアポップ看板とポップアップサイン、コーン用サインを制作し、消防訓練にて使用感の検証を行った。
3. 言葉に頼らず避難誘導を行う際「ピクトの意味が伝わるか」について、消防イベントにて一般の方を対象にアンケート調査を行った。また、那覇市の赤十字病院から「外国人の多い町での誘導に使用したい」との打診があったほか、県内のショッピングセンターで発生した火災現場にて、館内の避難誘導に消防隊員がツールを使用したことから、自衛消防組織より試験導入したいとの打診を受け、ピクトグラムの重要性およびニーズをあらためて感じる機会となった。



NBC 災害を想定した消防訓練の様子



アンケート調査

**ー全体の反省・感想・課題**

授業外での取組であるため、学生のモチベーション維持が重要であったが、社会に役立つツール開発に関わっているという自負が学生に生まれ、学年縦断のチームが上手くまとまり、活動することができた。

**ー今後の継続予定**

言葉づかいや見え方にあらたな課題が見つかったため、さらなるデザインの改善を行いたい。また、外国人に対する情報伝達および夜間の視認性に対する検証も必要だと考えている。さらに、今回制作したモデルを各地の消防局へ送り、消防隊員によるテスト使用および評価を行い普及に努めていきたい。



## ⑭高森東学園義務教育学校

### プラン名

地域と連携した防災教育の取組  
～東学園5レンジャー！～地域の安全守りタイ出動！

### プランの対象

小学生～中学生

### 所在地

熊本県高森町

### ープランの目的・ここがポイント！

熊本地震後、自然災害からの学びが多くありました。児童生徒の生活圏での避難所では、児童生徒が地域の方々と協力し活動することが望まれました。そこで、児童生徒の防災力・防災への知識が地域に影響を与えることを実感しました。今回、防災に取り組む5つの組織（教職員・児童生徒・保護者会・行政・地域組織）が連携を図りながら、学校防災力と個人の防災力を高める取組を計画していきました。組織の中で各立場が「防災について」の学習や活動を整理し、児童生徒が「防災について学び、体験し、伝え広げること」と「つながり」と「深まり」のある取組を目指しました。また、学校での学習では関連教科を活用した防災学習の実施、教職員間の研修の実施、児童生徒防災リーダーを中心とした活動、他機関と連携した防災学習・防災体験活動、現地での学習、地域への啓発などを行いました。

### ープランの概要

- ① 近地域各機関と連携した実践
- ② 関連組織（児童生徒・行政・教職員・保護者・地域組織等）の一人一人が自分の役割「できること」を意識・把握し動ける防災減災の取組にすること
- ③ 災拠点とした学校防災の機能の向上

### ー期待される効果・ここがおすすめ！

組織間で活動について意見を出し考え合うことで、地域や組織として動ける人々にまで活動の趣旨がながり、防災についての取組が地域的な防災に対する取組の効果を高めるきっかけとなる。

### ー成果として得たこと

- 昨年度までの防災教育については、行事とその内容に関係する立場の方々との連携で進んでいたが、一步進んで関係の組織同士（親父の会と地区消防団、行政など）でのつながりを持つ機会ができた。
- 児童生徒が、各専門家の方々に経験も含め話していただいたり、体験活動などをしていただいたりして従来の学びより深まりのある学習となった。
- 防災教育について計画を見直す機会となり、関連教科等でも防災について関連づけて学習につなげることができた。教師側も防災について学ぶ機会を多くもつことができた。
- 児童生徒が、防災について自分ができること、自分がしなくてはいけないことなどを考え行動する機会を持つことができた。
- 防災への取組の大切さを確認し合うことができた。

### ー全体の反省・感想・課題

保護者や地域の方々、行政の方々との連携で、様々な視点を取り入れた防災教育の学習を行うことができた。児童生徒にとっても、新鮮な学びの時間となった。また、日常生活の中で、地域で頑張っているの方々の思いを知ることもでき学校外の防災への取組についても考えることができた。このことは、自分自身の命を守る防災に限らず地域に目を向けた防災へとつながりや深まりができたと考える。



### ー今後の継続予定

今年度の取組をベースに取組の継続を行っていきたい。防災5レンジャーの5つの組織での取組は、これからの活動のベースになる。今年度の取組についての評価を行い、防災教育についてタッグを組み実施していきたい。

⑮球磨村教育委員会

プラン名 「自分の命は自分で守る」

プランの対象 小学生～中学生

所在地 熊本県球磨村

ープランの目的・ここがポイント！

- ①小中学生や教職員が本村の地形の脆弱性や想定される災害及び現在の村の防災の取組等を知ることを通して、できることを考える。
- ②小中連携の防災訓練や学校における避難所運営のあり方を検討する。

ープランの概要

- ① - (1) 村民防災会議ブロック会議への生徒（児童）・教職員の参加
- ① - (2) 小中学校及び教職員対象の防災学習会（研修会）の実施
- ① - (3) 小学生（5・6年生）から中学生（1・2年生）によるタイムラインの作成
- ① - (4) 小中学生（小3から中2年）対象に防災教育に関連した標語・ポスター募集と2019年度防災カレンダーの作成
- ① - (5) 各小中学校の取組
  - ・消防署による小学生対象の救命士講習会の実施
  - ・村民対象の気象学習会への教職員の参加
  - ・人吉球磨管内社会福祉協議会主催の災害ボランティアセンター設置訓練への中学生の参加
- ② - (1) 小中学校合同の総合防災訓練の実施
  - ・計画段階では役場総務課防災交通係（防災管理官等）、各学校長、各学校防災主任との密な連携
  - ・関係機関（自衛隊、消防署、消防団、警察、保育園、国土交通省等）との連携
  - ・趣旨や計画の周知と協力要請のために地域住民への説明会開催

ー成果として得たこと

- ・小中学校合同の総合防災訓練の実施を通して、小中学生や教職員の防災意識が確実に高まってきた。
- ・我が家のタイムラインを家族で話し合って作成したため、各家庭での防災意識の高揚につながった。
- ・防災カレンダー（2019年4月～2020年3月）作成のための標語やポスターの募集が、小中学生の防災意識の啓発につながり、カレンダーを通して小中学生の家族や地域住民の啓発につながると考えている。

ー全体の反省・感想・課題

- ・小中学生の防災意識の高揚や変容は、保護者や地域住民の意識を変えるほどに影響力があると感じている。
- ・小中学生が地域の大人とともに、村民として、災害に強い地域づくりの担い手となり、地域全体の防災意識や防災力を高めることに貢献できるよう取組を見直していきたい。

ー今後の継続予定

- ・我が家のタイムラインをより実効性のあるものに見直しを図っていきたい。そのことを通して、班や地区のタイムライン作成につながればと考えている。
- ・地域を巻き込んだ小中合同の防災訓練は、コミュニティ・スクールの取組として、また地域学校協働活動の一環として実施していきたい。





## ⑩ 「災害に強い街づくり大綱」実行委員会

**プラン名** 防災協力拠点のファーストミッションボックス（FMB）を作る

**プランの対象** 大学・一般

**所在地** 千葉県大網白里市

### ープランの目的・ここがポイント！

東日本大震災が発生し、防災の重要性を考えていたところ、FMBを知り、当地域でも実施したいと思った。地域防災の拠点となる法人事務所（大里総合管理）にFMBを作り、減災に繋げるチャレンジをする。

### ープランの概要

地域活動を行っている有志で実行委員会を組織し、FMB導入の実績のある飯田市他の視察を実施、ワークショップを重ねて、地域の人たちの力を効果的に防災に結び付けることの出来るFMBを作る。作成したFMBを使用して、地域の人々と防災訓練を実施、更なる改良点を見出しながらFMBの質を向上させ、地域の防災資源として位置付けていき、「大綱」地区の街おこしにつなげて行く。プレゼン資料を作成し、地域にFMBの設置を広く周知する広報活動を実施（行政、学校、各団体等）

### ー期待される効果・ここがおすすめ！

FMBを設置した法人事務所は、活発な地域活動拠点である。コンサート・セミナー等多数が実施され、地域住民が気軽に入出りできる環境となっている。来訪者数は延べ年間数万人、メインフロアのだ真ん中に赤く目立つ木の箱で設置したため、他団体からも大きな反響がある。また個人からの質問も多く、大きな防災教育となっている。

FMBを使用した防災訓練は誰でも主人公（本部長）になれる。多くの参加者は簡単ではあるがミッションカードを読み→判断し→行動するという一連の行為を行う事になり、昨今の教育現場で実施されている「アクティブラーニング」にも合致したものであります。

### ー成果として得たこと

活発な地域活動拠点である法人事務所のメインの場所にFMBを設置し、プレゼン資料を準備したことで、地域にFMBの存在・内容を広く周知・広報できる体制を構築した。

3回のFMBを使った訓練を実施し、FMBの質を向上させながら、子どもから高齢者まで幅広い層の防災意識の向上、防災力の重要性の認識等に資することができました。

### ー全体の反省・感想・課題

当初、飯田市からいただいたFMBデータや視察に伺った時に拝見した現物を見ても、正直そのメリットを正確に理解出来ませんでした。それは、8月に実施した1回目の防災訓練（小学生対象）でも同様でした。中間報告会で種々のご指摘をいただき、国崎先生にご指導いただいた2回目の防災訓練（11月）や3回目の防災訓練（12月）により、やっとその優位性の一部を理解出来たものと思います。反省点は2回目の防災訓練を早い段階で出来ていれば、より地域の他団体への周知・広報が進み最終報告会でその進捗をお伝え出来たかと思えます。



しかし、今からでも遅くないと考え、活動を継続することで2月の最終報告会では何等かの実績をご報告したいと考えております。

### ー今後の継続予定

プレゼン資料（紙ベースと動画使用のデータベース）を活用し、地域の他団体（自治体・学校・自主防災組織・各団体等）への広報活動の実施

FMBを設置した大里総合管理（株）には全国から定期的に様々な団体が視察に来社する。先日も島根の団体が来社し、FMBの資料請求があり対応しました。全国への広報活動も実施してまいります。

## 防災教育チャレンジプランに期待する

防災教育チャレンジプランが2004年に今の形になって15年がたちます。この間300近い優れた活動を支援させていただきました。そして、2015年にはそれまでの成果を踏まえ、防災教育をしたいと思う人が、どう準備し、どう実行し、どう継続するかノウハウをまとめた「地域における防災教育の実践に関する手引き」を公開しました。同時に防災教育に関わるさまざまな団体と共同して防災教育普及協会も設立できました。最初の10年は防災教育を普及させる10年と位置づけられ、今の10年は東日本大震災からの復興の教訓も加味しながら防災教育を体系化する10年にしたいと思って活動しています。

防災教育チャレンジプランの成果は、頻発する風水害そして21世紀前半に発生が確実視されている南海トラフ地震や首都直下地震のような広域にわたる巨大な地震災害を乗り切る上での大きな資産です。それを活かして災害に立ち向かう主役は1980年以降に生まれた若い人たちです。若い人たちが、自分自身を守り、お互いに助け合っていける力を育てることが、この国の将来にとって不可欠です。これは学校だけの仕事ではなく、学校・地域・家庭が協力してさまざまな試みを重ねていくことが大切です。

今年度のチャレンジプランには、34団体の応募をいただきました。どれも素晴らしい内容でしたが、予算の制約があり、今回はその中から15団体のプランを選ばせていただきました。防災教育の内容をできるだけ多様にできるプラン、いろいろな場所でできるだけ幅広い層が関われるプランへと成長してほしい「たね」を重点的に選ばせていただきました。選ばれた各団体はいろいろな面で「チャレンジ」し、今後の防災教育を推進する上での共通の資産を増やすために努力をしてください。

今回選ばれた皆さんのプランが今日をスタートとして、1年間の実践を経て大きな実を結び、来年2月の活動報告会に成長した姿で戻ってきてくださることを期待してやみません。

防災教育チャレンジプラン実行委員長  
国立研究開発法人 防災科学技術研究所 理事長

**林 春 男**

我が国は、その自然的条件から、各種の災害が発生しやすい特性を有しております。未だ記憶に新しい東日本大震災や熊本地震を始め、2018年は、大阪府北部地震、西日本豪雨、台風21号、北海道胆振東部地震など、大規模な災害が相次いで発生しました。

政府としては、こうした災害について調査・分析を行い、課題・教訓などを活かした防災対策を進めておりますが、災害被害を軽減するためには、「公助」と連携した「自助・共助」の取り組みが必要不可欠です。

そのため、国民一人ひとりが自然災害に対し「自らの命は自らが守る」という意識を持つためには、学校等とも連携し、子どもの頃から防災教育や避難訓練を通して、自然災害の危険性や各種災害への対応方法について学び、適切に備えることが災害被害を軽減するためには重要となります。

皆様からのご支援により、「防災教育チャレンジプラン」の取組は今年で16年目を迎えます。今回選ばれた15団体の皆様には、精力的にご活動いただき、地域の防災活動の主体となりご活躍いただくとともに、この取組のさらなる発展と我が国の防災力向上に貢献していただくことをご期待申し上げます。

防災教育チャレンジプラン実行委員  
内閣府政策統括官（防災担当）付 参事官（普及啓発・連携担当）

**佐 谷 詠 子**



## 2019 年度実践団体の紹介

### 【1】 名古屋市立工芸高等学校 都市システム科 “ひと”と“まち”づくり協創ワーキンググループ

プラン名

“希望のひかり”  
～届けたい。私たちの力で。安心できる「ひかり」を～

応募部門

高等学校の部

所在地

愛知県名古屋市



#### 一目的・特徴等

昨年9月に発生した「北海道胆振東部地震」及び同月末に和歌山県に上陸し、日本列島を縦断した「台風24号」では、その要因は異なるものの、併せて約370万戸が停電する事態が発生しました。本プランでは、このような背景の下、停電しても、安心して無事に避難所に着くことができることを目指し、住民や自治体と協力して夜間避難訓練を実施し、ここで得た知見を下に「安心なまちづくり」に活かすための手法について様々な観点から検証します。

#### 一団体紹介

本校都市システム科は、平成30年に創設75年を迎えた歴史ある土木系学科です。近年の技術の革新や社会情勢の変化を受け、「防災教育」、「まちの魅力を活かしたまちづくり」、「ICT技術」、さらには「インフラマネジメント」に関する教育の充実に向けて努めてきています。

今回の応募を契機として、これまでの「防災」から、「災害に備えたまちづくり」に発展的に転換し、生徒が授業で学んだ知識及び技術を糧として、地域社会とともに、この在り様を探究することを通して、住民主導の「安心なまちづくり」の実現を寄与することを目指します。



### 【2】 高知県立大方高等学校

プラン名

高校生が作る「地区防災計画」～マニュアルと訓練の反復～

応募部門

高等学校の部

所在地

高知県黒潮町



#### 一目的・特徴等

このプランの特徴は、これまでの津波避難訓練中心の防災教育とは異なる、避難生活を視野に入れた防災教育です。昨年度はオリジナル HUG を作成し、避難所運営について学習することを通して、被災時に高校生にできることを考えました。本年度は地域の方々への提案、周辺に位置する保育園・小学校・中学校との連携を進め、大方高校周辺地区の防災計画を充実させることに貢献したいと考えています。このような活動を通して地域を考え地域で活躍することは、高校生にとって大きな学びになると考えています。

#### 一団体紹介

高知県立大方高等学校が位置する黒潮町は、南海トラフ地震で最大34メートルの津波高が予想されており、近年防災・減災活動により一層の力を注いでいます。

本校は規模の小さな学校ですが、その分地域の方々と一緒に活動する機会も多くあります。学校の周辺には、保育所、小学校、中学校があり、巨大地震に遭遇した際に高校生が果たす役割は大変重要なものになると考えています。在校中はもちろん、卒業後もそれぞれの場所で防災リーダーとして活躍できるような生徒を育てたいという思いで、より発展的な防災教育を推進していきたいと思っています。





### 【3】目黒星美学園中学高等学校

プラン名

地域に広げたい「わくわく防災減災」—長期的視点を持った防災教育を通じ、自ら考え生き残り・生き延びられる生徒を育てる—

応募部門

中学校～大学・一般の部

所在地

東京都世田谷区



#### —目的・特徴等

1. 生徒が楽しく主体的に取り組み、生涯忘れない防災教育の教材の作成と実践を行う
2. 生徒が想像力を働かせ自ら選択肢を考え、災害時に応用できる判断力を身に着ける防災教育を目指す
3. 生徒のアイデアや提案を実際の地域防災に活かしてもらうことを目指す
4. 学校内の教員間の連携と共に、学校外との連携を深める
5. 防災教育の取り組みに悩んでいる教員のヒントになる取り組みを目指す
6. その中で、防災のイメージアップを図る



#### —団体紹介

本校では「被災地ボランティア研修」を実施する中で、防災意識が高まり「私たちは未来の被災者」を合言葉に、校内外で活動しています。特に、「生徒に防災を教える」という意識を転換し、「防災のヒントを与えて、女子中高生ならではのアイデアを引き出す」防災教育を展開しています。災害時に深刻なトイシ問題への取り組みも特徴的です。また、災害時に「福祉避難所（母子）」となる協定を結んでいます。昨年度、防災教育チャレンジプラン実践団体として、多くの学びと活動の広がりがありました。今年度も皆でわくわく活動に取り組んでいきたいです。

### 【4】岡崎市立常磐東小学校

プラン名

地域・学校・関係諸機関が連携した防災活動

応募部門

小学校高学年の部

所在地

愛知県岡崎市



#### —目的・特徴等

1. 児童が、自らの身の安全を自分で考えて確保できるようにする。
2. 地域や関係諸機関と連携を密にし、児童の積極性の育成を図る。
3. 活動から児童の達成感や自己存在感を培い、生きる力を育てる。
4. 防災活動を通して地域の一員としての自覚を児童の心に育てる。
5. 防災マップ作成やアンケート実施で地域の防災意識高揚を図る。



児童の考案した防災看板の設置

#### —団体紹介

常磐東小学校は 118 年を迎える伝統校ですが、全校 42 名の小規模校です。児童は、人との関わりが少なく、素直な反面、積極性に欠ける面があります。学区は、昔は石の町として栄えていましたが、今は、若い人が離れ、過疎化・高齢化が急速に進んでいます。県より土砂災害特別警戒区域に 85 か所指定され、危険な所が多くありますが、避難が容易にできない方もいます。地域の方は、学校を核とした防災活動に期待しています。



防災発表会（児童・地域）

## 【5】立正大学地球環境科学部 教育工学・学習科学研究室

**プラン名** 水害メカニズムの要素になりきる-演劇&防災 WS-

**応募部門**

小学校の部、大学・一般の部

**所在地**

埼玉県熊谷市



### 一目的・特徴等

大学生及び小学生が水害メカニズムをその構成要素（水、堤防などになりきるロールプレイ手法をとり、演劇表現することで体感的に理解しつつ、観覧者にわかりやすく伝えます。その直後に、観覧者である保護者とともに、水害メカニズムを基礎的理解とした具体的な防災計画立案（例えばハザードマップの理解と逃走経路の確認）をするWSを行います。



### 一団体紹介

立正大学地球環境科学部教育工学・学習科学研究室では、アクティブ・ラーニングを中心に、学習者中心の教育・学習方法や学習環境について研究しています。同時に、地域連携活動にも注力し、見てみようよ！常総市の会にも参加しています。

防災教育においては、教育を実施する側にも、実施をされる側にも、双方で学び合い、より良い形を探究していこうとするやり方にはどのようなものがあるのかを考えています。



## 【6】被災地を写真でつなぐ実行委員会

**プラン名**

九州北部豪雨の発災から復興  
～今だからできる学びのかたち～

**応募部門**

大学・一般の部

**所在地**

福岡県北九州市



### 一目的・特徴等

九州北部豪雨から1年半。被災地の復興は未だ20%しか進んでいない地域もある。この事実をどれだけの人が知っているだろうか。

このプランでは、九州北部豪雨の風化を防止するとともに、家庭において災害について考えるきっかけを創出することを目指す。九州北部豪雨の写真の記録から伝えることのできる防災。復興過程が今、そこにあるからこそその「フィールドワーク」を中心とした防災教育。これまでの取り組みをまとめ、発信するからこそ波及する災害支援。3つの活動を柱に活動していく。



### 一団体紹介

九州北部豪雨発災後、北九州市立大学では、大学生災害ボランティア支援センター（通称：うきはベース）の運営や災害復旧支援に携わらせていただいている。その後、うきはベースの活動の中で見えてきた「九州北部豪雨の風化・災害ボランティア参加者の減少」この2つの課題を解消するために、写真展の活動を開始した。平成30年6月には「被災地を写真でつなぐ実行委員会」を設立し、子どもたちへの防災教育など、被災地での学びを市民にフィードバックする活動も行っている。

これまで写真展を8か所で開催。朝倉日帰りツアーを1回開催した他、講演活動も行っている。





## 【7】京都市立正親小学校

プラン名 守れ正親 われら少年防災隊

応募部門 小学校高学年の部

所在地 京都府京都市



### 一目的・特徴等

私たちの住む地域は古くからの街並みが残り、細い路地に家がひしめき、行き止まりや迷路のようになっている。密集市街地である正親は、大きな地震や火事があるとひとたまりもない。町歩きをしてその危険性に気付くとともに何とかしなければならないという切実感を感じさせたい。そして、防災かまどを修復することや防災フェスタの企画・休み時間防災訓練など、今の自分たちにできることを考え、実行していきたい。



### 一団体紹介

京都市立正親小学校は京都市の上京区西陣に位置しており、明治5年の学制が始まる3年前に、地域の人々が「子どもたちのために」とお金を出し合い建設した、いわゆる番組小学校である。来年創立150周年を迎える歴史と伝統のある学校で、校舎は築80年以上であり、外壁はタイル張り、内装にも大理石が施されているように当時としては豪華な作りである。現在児童数は168名、全ての学年が単級の小さな学校である。少人数を生かした縦割り活動が盛んで、学年を超えて仲良しである。またその立地や、学校を愛する地域愛のある地元の方々を財産とし、地域をテーマに総合的な学習を展開し、地域を愛する子の育成を目指している。



## 【8】新居浜市立金栄小学校

プラン名 土砂災害・浸水被害から命を守れ。～過去の災害から学ぶ～

応募部門 小学校高学年の部

所在地 愛媛県新居浜市



### 一目的・特徴等

#### 【目的】

1. 平成16年に新居浜市金栄校区で発生した台風災害による被害体験を次世代に継承させ、平成16年豪雨災害を風化させない。
2. 西日本豪雨災害から学び、命を守る大切さを身に付ける。
3. 土砂災害、浸水被害から命を守り、人的被害を防ぐ。

#### 【特徴】

1. 被災した教訓をもとに地域特性を知り、災害から命を守る避難行動を学ぶ。
2. 地域の危険箇所等をe防災マップなどに反映し、地域で情報共有を図る。



### 一団体紹介

新居浜市では、平成16年豪雨災害で甚大な人的、物的被害を受けました。西日本豪雨災害では、かろうじて大きな被害はなかったものの、愛媛県内でも特別警報が発令されるなど、被災する可能性は紙一重でありました。このことから、被災した経験を経て、金栄小学校5年生が1年間を通じて、防災学習の取組を実施し、自治会、地域見守り隊などの関係機関とまちあるきを行い、e防災マップなどの作成などにも取り組んでおります。あらゆる自然災害などから被害を出さないためにも、地域の防災力の向上を図ることを目的として防災活動を行っています。



## 【9】ミラクルウィッシュ

**プラン名** さんだ女子防災部

**応募部門** 保育園・幼稚園の部、  
大学・一般の部

**所在地** 兵庫県三田市



### 一目的・特徴等

「乳幼児を持つママたちの、ママたちによる、ママたちのための防災組織」といえば「さんだ女子防災部」となるべく、学校における防災訓練や勉強会の機会の少ない未就園児・未就学児を持つ母親に特化した防災コミュニティの構築と存続を目指します。知識の獲得や備えに対する学びにとどまらず、日頃から孤立することなく地域社会で安心して子育てができ、いざという時に命を守れる行動ができる組織・地域社会づくりに取り組みます。



### 一団体紹介

2014年1月、兵庫県三田市にて乳幼児を育てるママが集い「子育てしやすい街『三田』をもっと楽しみたい」「三田での子育てに小さなミラクルを起こしたい」と活動を開始。こんな事をしてみたい、あったらいいな」と思うことを仲間で共に考え具現化することで、「地域で支えあえる人との出会いや支えあいの仕組みづくり」の場を作り、「さんだ女子防災部」の他、ママのやりたいことを応援する「ミラクルママ講師」、子どもたちがお金の仕組みと大切さを体感できるイベント「子ども店長」等を企画開催し、地域貢献に努めている。



## 【10】北海道標津高等学校

**プラン名** 標津高校防災啓発プロジェクト

**応募部門** 高等学校～大学・一般の部

**所在地** 北海道標津町



### 一目的・特徴等

高校生が主体となった公助について発信し、高校生から取り組む防災を考える。また、HUGを取り入れ避難所としての学校の役割を地域住民や役場と共有する。さらに、根室海峡に接する近隣高等学校との生徒間交流を通じて、高校生の防災意識を向上させ、防災リーダー育成の一助とすることを目的とする。



### 一団体紹介

本校は、北海道標津町内にある全校生徒数170名の小規模校で、洪水、高潮、雪害、津波被害の想定される地域に位置しています。本校生徒会では、HUGを取り入れた防災の取組を実施、さらに町主催の防災訓練に協力をしてきました。近年は、本校の避難所としての機能を確認するために教職員と生徒によるHUGを実施、また、PTA研修会でもHUGを取り入れ、防災意識の向上に努めてきました。生徒会交流も実施しており、釧路管内の高等学校や隣接する羅臼高校との交流会を重ね、活発な生徒会活動を実践しています。





## 【11】愛媛県立宇和島東高等学校

プラン名

「学ぶ」から「教える」「育てる」へ  
 小さな防災士が地域を助けるプロジェクト

応募部門

高等学校の部

所在地

愛媛県宇和島市



### 一目的・特徴等

本校の立地する宇和島市文京地区は5つの学校と1つの幼稚園が近接しており、合同避難訓練や学習会が行われています。その5校1園の学びを、より充実させたいと考えています。

本校は、本チャレンジで、『高校生が学ぶだけでなく、小中学生にその学びを広げる』ことに挑戦し、地域全体の防災力向上に努めます。平成30年7月の西日本豪雨で経験した避難所生活・避難所運営をテーマとし、その体験を体系化した高校生の学びを小中学生に伝えます。

### 一団体紹介

愛媛県立宇和島東高等学校は、愛媛県南予地方に立地し、創立123年目を迎えた伝統校です。全日制普通科・理数科・商業科、定時性が設置され、アクティブラーニングや課題研究などによる、問題解決型の学習が多く取り入れられています。スーパーサイエンスハイスクール SSH 事業の活動も盛んです。また、質の高い文武両道をモットーに部活動に励み、文化部・運動部とも多くの部が全国大会で活躍しています。

委員会活動やSSH課題研究などで防災について学んできました。自分たちの学びの場を、近隣の小中学生に広げ、地域の防災力向上につなげたいと思います。



## 【12】新潟市立白南中学校

プラン名

オレンジはレスキューの魂 ～白南地域は私たちが支えます～

応募部門

中学校の部

所在地

新潟県新潟市



### 一目的・特徴等

1. 中学生が中学校区における地域防災の課題を多面的に洗い出し、その解決策を思考、検討する過程を通して地域を支える意識を育てる。
2. 実践的な活動を軸に、3コミュニティを融合させた、継続可能で実践・実用的な独自の防災訓練プログラムを策定する。
3. 段階的な実践活動を意図的に仕組むことで、「いざ!」という時にこそ、地域住民と生徒、教職員双方が互いに顔がわかり、連携し共に行動できる関係性を構築する。

### 一団体紹介

当校は、2003年に中学校統廃合により、新しく創設された学校である。生徒は、三地域から通学している。三地域はそれぞれ歴史が古く、商業、果樹栽培、農業と中心をなす生活基盤が違い、生活様式、考え方、気質等に少しずつ違いがある。当校は、この三地域を融合した新しい地域づくりを推進するミッションがある。

校区は輪中地域にあり、65歳以上の高齢者が多い。住民の多くは川を渡って通勤・通学をしており、平日の災害発生時等は中学生の力が求められ、地域の期待は大きい。

中学生も「地域に貢献したい」という強い思いをもち、防災の具体的な知識や技能を身につけたいと考えている。



### 【13】NPO 法人小網代野外活動調整会議

**プラン名** 小網代の森で「流域思考」による温暖化豪雨時代の防災を考える

**応募部門** 中学校～大学・一般の部

**所在地** 神奈川県三浦市



#### 一目的・特徴等

##### 目的

- ①頻発する水土砂災害に対する正確な理解をし、対応策を学ぶ
- ②流域思考で防災を考えることの重要性を学ぶ
- ③防災ウォーキングや、防災ポーチ作りのイベントを通して、日常的な防災意識を高める。

##### 特徴

- ①イベントとシンポジウムの開催を三浦市社協と連携して実施することにより、地域の防災意識を高めることができる。
- ②流域思考による防災を正確に理解することにより、被災しないための対応を日常的に実践することができる。
- ③流域思考により自分の暮らす町の地形を知り、自治体で発行するハザードマップにだけでは分からない危険について理解することができる。



#### 一団体紹介

当法人は三浦市にある小網代の森で生物多様性保全の管理作業を流域思考で実践しています。小網代の森の地形を活かして、流域思考での環境教育や防災教育も実施しています。今年度からは三浦市社会福祉協議会と連携し、健康や福祉に関わること共に、防災についても地域の方々と一緒に考え学ぶ活動を始めました。「流域」で防災を考えることは、地域の方々にとどのように役立つのか、実際にはどのような防災の取り組みができるのかを考えながら活動しています。

環境問題と防災が密接な関係にあることを理解していただけるような防災イベントを実施しています。

### 【14】京都市立鴨沂高等学校

**プラン名** 新しい校舎を活かす防災教育

**応募部門** 高等学校の部

**所在地** 京都府京都市



#### 一目的・特徴等

本プランの特徴は、平成30年8月に竣工した新校舎を防災の施設として、避難所としての視野にいれた次のことにあります。(1) 京都の災害の歴史から学ぶこと。(2) 科学的な見地から探究学習すること。(3) 生徒が地域のリーダーとしての資質向上すること。以上のことを踏まえ、先ず自分自身の身は自分で守り、災害に備えること、地元地域の方々への貢献ができることが期待できます。また、このプランが新たな伝統となり、これからの礎となります。



#### 一団体紹介

鴨沂とは、鴨川のほとりという意味で、校舎建て替えの際、発掘調査で、天明の大火の黒く焦げた地層や、かつて鴨川の川底であったことを当時の生徒も調査に参加し体験しました。大火や地震、洪水の文献も京都は千年の都であっただけに数多くあり、その教訓を活かさねばなりません。学校の西隣は仙洞御所があり、その周囲には京都御苑が広がり、災害時には大きな役割を果たさねばなりません。そのためには、施設としてだけでなく、これまで地域と密に連携した関係と生徒自らの能力を防災に備えて発揮してゆきたいと考えます。





## 2018年度 審査委員の紹介

委員長	渡邊 正樹	東京学芸大学教育学部 教授／日本安全教育学会 理事長
委員	安藤 雄太	法政大学現代福祉学部 兼任講師
委員	池内 幸司	東京大学大学院工学系研究科 教授
委員	小原 一成	東京大学地震研究所 所長・教授
委員	重川 希志依	常葉大学社会環境学部社会環境学科 教授
委員	嶋倉 泰造	東京海上日動リスクコンサルティング株式会社 代表取締役社長
委員	土橋 久	国立研究開発法人防災科学技術研究所 理事
委員	戸田 芳雄	学校安全教育研究所 代表
委員	花石 啓介	日本電信電話株式会社技術企画部門 災害対策室長
委員	林 春男	国立研究開発法人防災科学技術研究所 理事長
委員	福島 隆史	株式会社 TBS テレビ報道局社会部兼解説・専門記者室 解説委員
委員	升屋 好永	全国連合小学校長会 庶務部長／上尾市立上尾小学校 校長
委員	山上 伸	東京ガス株式会社 アドバイザー
委員	山崎 登	国土館大学防災・救急救助総合研究所 教授
委員	山本 竜太郎	東京電力ホールディングス株式会社 常務執行役
委員	米澤 健	内閣府 大臣官房審議官（防災担当）
委員	米田 徹	特定非営利活動法人日本ジオパークネットワーク 理事長／糸魚川市役所 市長

(平成 30 年 10 月 10 日現在、50 音順、敬称略)

## MEMO

# 防災教育チャレンジプラン募集の御案内

## 1. 募集の概要

防災教育チャレンジプランでは、全国で取り組まれつつある防災教育の場の拡大や質の向上に役立つ共通の資産をつくることを目的に、新しいチャレンジをサポートいたします。

そのプランの準備・実践に当たって発生する経費を支援し、実現に向けて防災教育チャレンジプランアドバイザーが伺うなどして相談などの支援を行います。

応募の中から選ばれたプランは、活動計画について前年度の活動報告会（最終報告会）で発表、さらに1年間実践した結果を、交流フォーラム（中間報告会）と活動報告会（最終報告会）で成果を発表していただきます。

活動報告会（最終報告会）においては、優秀な実践活動に対して防災教育大賞、防災教育優秀賞、防災教育特別賞を授与いたします。

また、皆さんのチャレンジプランの成果はホームページなどで広く公開いたします。

サポート内容	<ul style="list-style-type: none"><li>■ プランの実践にかかる経費の提供／上限 30 万円(査定による) ※活動・予算計画書の提出及び団体名義の口座が必要となります。</li><li>■ 交流フォーラム(中間報告会)・活動報告会(最終報告会)発表者への交通・宿泊費の支給。(1名分×3回分)</li><li>■ プランの実現に向けて、実行委員会が認定する防災教育チャレンジプランアドバイザーが助言や現地指導等の支援を行います。</li><li>■ 防災活動の手法・事例の収集と活動情報の発信ができる各種 web ツールを提供します。</li></ul>
表彰	<ul style="list-style-type: none"><li>■ 活動プロセス及び成果に対して審査を行い、優秀な実践活動に対して、防災教育大賞・防災教育優秀賞・防災教育特別賞を決定し、表彰状と盾を授与いたします。</li><li>■ 防災教育チャレンジプラン「サポーター」として認定いたします。</li></ul>

## 2. 応募資格

- 防災教育を一層充実させたいと考えている教育・社会福祉施設(保育施設・幼稚園・学校等)、教育委員会、NPO、民間企業、個人、地域団体(民間事業所、各種団体、行政機関)
- 採用された場合は、都内にて開催予定の実践団体決定会、中間報告会、最終報告会の計3回の会合に出席できること。

## 3. 応募部門（プランの対象別）

- A. 保育園・幼稚園等の部    B. 小学校低学年の部    C. 小学校高学年の部  
D. 中学校の部    E. 高等学校の部    F. 大学・一般の部

## 4. 募集期間

毎年9月頃～12月頃に募集。詳細は、ホームページ上でお知らせいたします。



## 防災教育チャレンジプラン

- 防災教育チャレンジプラン実行委員会事務局  
E-mail : [cpinfo2865@bosai-study.net](mailto:cpinfo2865@bosai-study.net)
- 防災教育チャレンジプランホームページ  
<http://www.bosai-study.net/>

※E-mail アドレスは、予告なく変更することがあります。  
最新情報は、ホームページでご確認ください。